

図書館情報学科設立17年を振り返って

Reflections on the Establishment of the Library and Information Science in Aichi Shukutoku University

山本 進*

Susumu YAMAMOTO

1. はじめに

愛知淑徳大学・文学部図書館情報学科が設立された1987年（昭和62年）より3年前の1984年（昭和59年）夏に逆上って、この記録が始まる。

当時私は、名古屋市鶴舞中央図書館の館長であり、鶴舞中央図書館の建設工事を進めている最中であった。建設中の仮設館長室に愛知淑徳短期大学図書館兼大学図書館事務長の林 勇一先生が訪ねて来られ（別掲）小林素三郎学長先生からの「図書館情報学科設立趣意書」と「名古屋市図書館協議会への文部大臣宛推薦書」を持参され、ご協力方という依頼であった。また同様趣意書を「愛知図書館協会」（県図書館内に事務局）にも紹介して欲しいと重ねての依頼であった。

その後、小林素文副学長（現学長）、小林春治事務局長にも度々お会いして、愛知淑徳大学文学部図書館情報学科の設立と大学施設（大学図書館の増改築）・情報学科用資料の充実・コンピュータ導入などについて具体的に計画をたて仕事の段取りを決めて、作業を押し進めることになった。

図書館情報学科が設立された1987年には、私は未だ名古屋市鶴舞中央図書館の現職館長であって、大学図書館の増改築やコンピュータ導入について本格的なお手伝いは出来ないまでも、週一回の非常勤講師の授業日には大学の教職員等と夜遅くまで打ち合わせをすることも度々あった。

こうして、私と愛知淑徳大学との関わりが出来たわけだが、振り返れば17年有余大してお役にたったとは思えない日々を、時系列に記録することで、私の責めを果たしたいと思う。

* 愛知淑徳大学 文学部図書館情報学科

Department of Library and Information Science, Aichi Shukutoku University
JOURNAL OF LIBRARY AND INFORMATION SCIENCE. Vol. 18, p. 1-7 (2004)

2. 私と愛知淑徳大学への関わり

昭和58年7月始め建設中の雑然とした仮設の中央図書館の館長室へ(当時私は名古屋市鶴舞中央図書館の館長だった)愛知淑徳短期大学図書館事務長の林 勇一先生が訪ねて来られた。今は亡くなられた林 勇一先生は、前は鶴舞中央図書館の副館長をしておられた我々の先輩でもあり、当時は短大図書館と大学図書館の両方の事務長を兼ねておられた。

ご来訪の主旨は、今度愛知淑徳大学に新設したい図書館情報学科について、地元の図書館関係団体である“名古屋市図書館協議会”から図書館情報学科の設置要望書が頂けないものだろうか、それと愛知図書館協会にも同様の主旨で紹介を頂けないだろうか、と、小林素三郎先生の手紙を添えての来訪であった。私は、かねてから県下・地域の図書館活動の振興発展について努力していたこともあって、地元大学に図書館学関係の学科があって図書館に優秀な司書の人材供給の必要性を痛感していた矢先でもあって、大いに力を貸しますと約束をした。

それから、小林春治事務局長や副学長(現学長・小林素文先生)にもお会いして、大学の「図書館情報学科」新設についての並々ならぬ決意と努力の程を伺い、一層の力をお貸しすると約束をした。

こんなことがあって、いよいよ昭和60年春図書館情報学科が新設され、図書館情報学科の新しいカリキュラムによる専門教育が始まることとなった。

これより先、愛知淑徳大学図書館情報学科の新設を文部省に申請する段階で、専門科目の具体的な教授や講師の人選がすすめられるなかで、慶応大学の図書館情報学科の津田先生(愛知淑徳大学図書館情報学科の初代学科主任)や副学長の小林素文先生(現学長)等にお会いし、図書館情報学科のカリキュラムの中で、特に図書館学や図書館の実務について、経験や体験を生かした講座を担当してほしいとの強い依頼もあって、61年度の講義から、その中の一部を講師と

して担当することになった。

私は昭和61年度末をもって名古屋市の職員を定年で退職することになっており、退職後は、本務として愛知淑徳大学図書館情報学科にご厄介になることになり、現在に至っている。以上が私の愛知淑徳大学との関わりが出来た一部始終である。

3. 1 大学図書館施設の改善とコンピュータの導入について

こんな学科新設の慌ただしい状況の中で、

資料1. 1985/01/31, 日本経済新聞名古屋朝刊(社会面)

愛知県下の私大三大学で、この四月からユニークな学科が発足する。「情報感度のよい“テクノレディー”の育成を掲げて、淑徳大学が図書館情報学科をスタートさせるのをはじめ名古屋商科大は国際経済学科、大同工業大は応用電子工学科をそれぞれ新設。いずれも東海地方では始めて設置される学科で、「先端技術」「国際化」などこの地方が立ち遅れている領域にマトを絞っているのが特徴だ。

愛知淑徳大学の図書館情報学科は、従来からの図書館学に加え、OA(オフィスオートメーション)やニューメディアなど高度情報社会の情報処理を学ぶ。定員は100人。司書や学芸員、情報処理技術者などの資格が取得できる。

このため、約四億円を投じて校舎(鉄筋三階建て、延べ千五百平方メートル)を建設、一階にOA実習室など最新の実習設備を持つ情報科学センターを置く。また、よりオフィスに近い環境で知識を身につけられるように、教育用LAN(企業内情報通信網)を導入、パソコン、ワープロ各二十二台と光ディスクファイル、高性能コンピュータを相互に結び付ける。

図書館情報学科は現在、国立の図書館情報大、私立では慶応大にあるだけで、女子大では全国でも初の設置となる。教授陣には津田良成慶大教授、大井正一日本科学技術センター部長、山本進名古屋市鶴舞中央図書館長らが決まっているほか、東海銀行や豊田中央研究所の部長クラスが非常勤講師として教壇に立つという。

資料2. 愛知淑徳大学図書館

{設計: 竹中工務店 延床面積:2,251㎡
蔵書収容力 300千冊 開館昭和62年3月
(応募者: 愛知淑徳大学図書館)

この図書館は旧図書館を増築し、ゼミ室視聴覚室、情報学演習室などのためのスペースの充実を行い、図書館の学習センター化を図ったものである。増築と既設部分が違和感なく統合され、新築と同様の効果をもたらしている。

1, 2階にある開架スペースは広くすっきりしブラウジングルームも快適である。カウンターの位置も適切で少人数で全館の効率的な集中管理が可能なこと、PCなど先端電子機器のための家具にも工夫が見られ、図書館の落ち着いた雰囲気をごわすことなく設置していることなど、機能的にも細心の注意をはらって計画されている。また、書架、床面、壁面、家具・調度のデザインもよく配慮されており、華麗な色彩配置などによって、女子大学らしい美しい空間をつくり出している。

大学にあって、研究情報はオンラインで外部から取り込むという方針であるとされるものの4年制大学としての蔵書数や年間増加数という資料規模に問題がある。資料の水準を一定以上に充実させていった場合には書庫が小さいと思われることや、それが中心部にコアとして配置されていることなどが問題と考えられる。

この図書館は、例えば、学習機能をより重視する短期大学図書館の女子学生のニーズに応えるものであれば成功例として推奨できようが、4年制大学ならば一次的な学術研究情報すなわち蔵書の充実をもっと考慮した計画とされるべきであろう。この点から建築的な質は高いものの、建築計画の前提となる資料や運用面についての考え方において説得力に欠くものがあると言える

* 第4回 日本図書館協会建築賞
第二次審査総評
(図書館雑誌 1988.8)

「図書館情報学科のある大学に相応しい施設の充実した図書館」とを考へておられた小林素三郎学長が、講師であった私や、図書館情報学科新設準備担当の各先生を交えた「大学図書館の改築・コンピュータ導入委員会」を設立提案されて、昭和61年度中に検討と建設・コンピュータ導入を完了するよう命ぜられた。

61年度の夏休みに図書館の増改築工事が始まり、平行してコンピュータ導入検討と図書館蔵書のデータ化を進めることとなったが、前述の通り私は本務が鶴舞中央図書館の館長であり、時々大学に来て現場をみたり、打ち合わせ会に加わっていたものの、現場の図書館職員にとっては新しい仕事が押し寄せて、大変なことだったと思う。

このことは、私が大学へ務めることになってから「愛知淑徳大学論集-第14号-」に(大学図書館の改善-その実践の経過と今後の課題-)と題して拙文を載せているので詳細を省くが、大学図書館にとっては毎日が戦争のような状態ではなかったかと思っている。

建物やコンピュータのハード(機械)は工事を急がせたり、機械の納入契約さえ出来ればほぼ完成するが、このコンピュータに仕事をさせようとすると、基データ(図書館でいえば全蔵書の書誌)を入力しなければならないという大前提があり、62年春の学期始めには、新装成った図書館にコンピュータが入って(ハードもソフトも)備わっていなければならない。データの入力作業は専門の業者に外注をし、蔵書目録は新しいコンピュータで自館でプリントアウトすること等、今までしたことのない仕事をしたわけだから、図書館職員には大変きつい毎日だったようだ。

このようないろいろなことが重なって、猫の手も借りたいような状況だったが、62年3月末には、建物の竣工に漕ぎつけることができた。こうして私は、62年度当初から、大学へ本務として採用されることになり、しかも助教として講義も担当することになった。

3. 2 図書館へのコンピュータ導入と図書館システム構築の構想

図書館では1987年新設開館より文部省学術情報センター（現文部科学省国立情報学研究所）のNACSIISと連携して、第一期コンピュータ導入を、富士通のILIS/Mと決定しオンライン共同分担目録作業に参加した。

この共同分担目録作業は、短期大学図書館と大学図書館も同様に作業することで始め、順次この目録作業も充実し、目録データベース構築が出来つつあった。この目録はタイトルや著者、テーマ（分野）を表す分類記号などこの目録データの一部を表示したラベルを資料に貼付し書架に並べ、ラベルには「日本十進分類表」による0～9までの主題別分類と著者名のアルファベットの頭文字と数字を組み合わせた記号を付けている。

目録データベースはOPAC（オンライン目録）としてインターネット上で提供することが可能であり、OPACで探し出した資料の請求記号はラベルの記号と同じであり、請求記号をもとに書架に並んだ資料を探すことも可能である。

図書館施設の拡大により、大学図書館は様々な資料を収拾し、蔵書コレクションを充実しなければならない。利用できる資料は、現代の図書や雑誌ばかりでなく、江戸時代の日本文学研究には、当時の刊本や写本が資料ととして必要である。

雑誌や新聞は最新のものは冊子体や電子ジャーナルとして、過去のものマイクロフィルム・CD-ROMなどと、様々なメディアで出版されており、何れも重要な情報源となっている。資料や教材は専門分野の教育・研究に必要なものを収集し周辺分野や広く教養を養う目的でも、必要な資料や情報をこの図書館が所蔵していないにかかわらず、あらゆる手段により収集し提供することは、大学図書館の使命のひとつとして考えており、機会ある毎に積極的に収集したいと考えている。

3. 3 コンピュータのリプレースと図書館資料（雑誌バックナンバー用）の電動集密書架の増設

図書館資料のデータ充実にともなう窓口業務のサービス改善について、閲覧カウンターやレファレンスデスクの改善を図らなくてはならない。

コンピュータデータ充実の結果、窓口業務への積極的な導入と改善を図るべく、年次計画により資料についてのデータを入力している。

そのため、コンピュータ機器の次期リース機種はILIS-M汎用機に強化して契約した。

コミュニケーション研究棟・(図書館南3階棟地階部分)に電動集密書架を増設し雑誌バックナンバーを保存するとともに、複写サービスの拡充を図ることとした。

学術雑誌や新聞・マイクロフィルム・CD-ROMなど様々なメディアの出版物も図書館のコレクションとして増加しつつあるので、これらも保存提供する必要がある。そのため地階1階に電動集密書架を配置して、コレクションの充実を図り、様々な資料と教材を揃えることにした。

4. 1 司書課程科目の『図書館実習』科目の実施について

司書課程科目カリキュラムの中で『図書館実習』は、選択科目ではあるが、学生の履修希望の多い科目である。

学科では3年生前期に履修するようにしているが、実習の場所が大学図書館や公共図書館の現場にお願いしなければならない関係から、大学の夏期長期休業期間（夏休み中）に学生を参加させる必要がある。

8月と9月の夏休み期間（実習期間約1週間）として、実習実施館と参加学生とで日程調整をして実習期間を決める。

学生は、4月から7月までの間に行われるオムニバス科目（別表2）を履修する。

年 度	大学図書館	公共図書館	専門図書館	北京大学	合 計
(1995)	10館 23人	47館 116人	1館 5人		58館 144人
(1996)	10館 28人	45館 115人	2館 10人		57館 153人
(1997)	6館 13人	44館 110人	2館 6人		52館 129人
(1998)	3館 9人	62館 145人	1館 5人		66館 159人
(1999)	3館 10人	47館 99人	1館 3人		51館 112人
(2000)	4館 10人	63館 134人	1館 5人		68館 149人
(2001)	3館 18人	45館 103人	1館 4人	1館 41人	50館 166人
(2002)	4館 17人	52館 102人	1館 4人	1館 40人	58館 163人
(2003)	3館 18人	48館 106人	—	(SARSで中止)	51館 124人
(2004)	4館 19人	38館 88人	—	1館 23人	43館 130人
合 計	50館 165人	491館 1,118人	10館 42人	3館 104人	554館 1,429人

月日	授 業 内 容	担当教員
4/15	図書館実習ガイダンス	山本 進
4/22	図書館の勤務時間	山本 進
5/ 6	職階制度と司書職制度	山本 進
5/13	現場の資料組織の実際	山本 進
5/20	窓口業務とコンピュータ処理	山本 進
5/27	図書館活動評価指標	菅野郁子
6/ 3	図書館パフォーマンス指標	菅野郁子
6/10	テクニカルサービスとIT技術	伊藤真理
6/17	メタデータ、主題分析	伊藤真理
6/24	小テスト	菅野/伊藤
7/ 1	医学図書館	山崎茂明
7/ 8	医学図書館	山崎茂明
7/15	図書館実習の受入状況	山本 進
7/22	実習の心構え	山本 進
7/29	派遣と実習記録簿配付	山本 進

これは、実習前提科目であり、実習参加学生はこの授業を受講し、実習に参加して『図書館実習』が完了することになる。

実習中は、『実習記録簿』に日々の実習状況を記録させ、実習終了後学校に提出させて評価する。

実習希望館は、前年度実習を実施してくれた

図書館や学生の出身地方の図書館等、大学図書館・公共図書館・専門図書館など、50数館余に及ぶ多くの図書館のご協力を得て、実施することができた。

教育実習が授業期間内に実習を実施出来るのに反して、図書館実習は夏休み中に実習を行う関係から、訪問指導に図書館に出掛けられるのは夏休み中で、図書館情報学科教員も海外出張とか、国内研修の時期と重なり、図書館実習に学生が図書館に入っている期間中に、訪問指導できる時は限られている。うまく学生が図書館で実習中に訪問できるとは限らない。本来なら、図書館情報学科の教員が実習館を訪問して、館長や図書館職員にも面接して、実習内容や問題点、更には実習生に会って話し合える時間が取れたら、と思うばかりで、なかなか実現ができなかった。

更に、実習期間中の実習生の評価であるが「実習記録簿」を学生に日々記録させ、図書館実習担当者や図書館の館長や課長・係長など管理職に見てもらって、認印を捺印してもらうようにしている。このことも、各図書館の実習担当職員の所属や職務によってそれぞれ異なっており、「実習生個々の評価」まで図書館現場職員に負担を掛けないようにしなければならない。

4. 2 司書課程科目の『司書資格』取得希望 学生に対する対策について

ここ数年、司書資格を取得したいという学生が、年を追うごとに増えてきている。

図書館情報学科のカリキュラムだけの問題でなく、他学部・他学科が同じキャンパス内に無い（文化創造・医療福祉学部は星が丘キキンプラス）という場所的な問題にも起因している。図書館情報学科の司書課程科目を受講しようとすると、所属学部・学科の受講科目と重なり、受講出来ない、教室の移動に時間が掛かる等の問題が生じ、単位取得が困難だということである。

これに、図書館情報学科のカリキュラム運用に要する指導教員の不足、開講日・開講時間など様々な問題が持ち上がり、図書館情報学科の職員体制では処理不可能であり、対応職員の増員や特別なカリキュラム（夏期休業中の集中義の実施・土曜日の講義・ウイーククデー5.6限の開講など）対策を講じなければならないことが生じてきた。

この対策に専任で当たってもらうため、嘱託講師として、図書館情報学研究科、大学院博士課程前期終了生（修士課程）を1名委嘱して対応することとした。

この対応方法で、今年度後期から実際に開講して対応している。私も「図書館経営論」15コマを、「夏期集中講義」として最後のお手伝いをした。

来年度以降の「他学部用」司書課程科目の運用について詳細に検討したところである。

5. おわりに

私が、『文学部図書館情報学科』に奉職して17年が経過した。

「名古屋市鶴舞中央図書館長」が、私のお役所での最後の職場であったが、1日の空白も無く、「愛知淑徳大学・文学部図書館情報学科・助教授」の辞令を「淑徳学園」の理事長「小林素三郎」先生から交付され、今までのお役所か

ら、初めて経験する他の職場での二度のお務めをする事になった。

「淑徳大学図書館長」に採用されてから今日まで17年間を経過したが、半分以上の期間の8年間を『図書館長』として勤務したのは私が、歴代館長では始めてであったのではないだろうか。通常は、4年間を任期として順次交代する習わしになっているようである。

これは、大学図書館に始めてコンピュータが導入され、新しい図書館システム（オンライン目録）を立ち上げたばかりでもあったしコンピュータシステム（ILIS-M）も、5年を期間とする維持管理契約をしたこともあってシステムのスムーズな運用管理に熱中していたので、館長職の任期にまでは気が回らなかった。

慣例による館長の任期のことはお許しを戴いて、仕事に集中させて下さったことに、今更ながら感謝している。

初めての大学教員として、講義を担当することで驚いたことは、受講学生数が多いことであった。（司書課程科目の『資料組織論』と『図書館経営論』では、200人に近い受講生で、何時も教室は階段教室（401号教室・EC教室）を使った授業で、汗をかけたことも思い出として残っている。

これらのことは、楽しい思い出として受け止めて来られたことは、回りの先生方の心遣いがあったからこそ感謝している。

17年間の長きにわたって、支えて下さった皆さんに厚くお礼を申し上げます。

参考文献・注

- 1) 創立15周年記念誌刊行委員会.
「愛知淑徳大学の15年」, 1990.
(新聞記事)
 - ・日本経済新聞
「先端狙うニュー学科」
 - ・教育新聞
「愛知淑徳大学にニュー学科」

- 中日新聞
「キャリアウーマン育てます」
 - 朝日新聞
「図書館情報学科スタートを祝う」
- 2) 愛知淑徳大学,
「大学開学二十週年記念, 愛知淑徳大学20
年誌 1995」, 1995.
- 文部大臣 愛知県知事 宛
愛知淑徳大学図書館情報学科の開設に
ついて 1984年 5月10日
 - 愛知淑徳学園理事長 愛知県公立高等学
校校長会長 宛
図書館情報学科設立について要望書
1985年 9月14日
 - 愛知淑徳学園理事長 文部大臣
文学部図書館情報学科設置認可
 - 入学定員 100人, 収容定員 100人
 - 就学年限 4年
 - 開設年次 第1年次
 - 開設時期 昭和60年4月1日
- 3) 第4回 日本図書館協会建築賞
第二次審査の対象になったもの
◆愛知淑徳大学図書館,
図書館雑誌. Vol.1988.8,p480,1980
- 4) 愛知淑徳大学論集, 第14号
大学図書館の改善 山本進.
—その実践の経過と今後の課題—
1989年2月10日